名桜大学「琉球文学大系」編集刊行事務局報　第 11 号　　2024 年 12 月 3 日発行

カジ
風

公立大学法人名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学大系」編集刊行事務局
〒905－8585　沖縄県名護市字為又 1220 番地の 1　　TEL：0980－51－1039

平敷屋朝敏和文学の「思想」

大胡　太郎
（琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科教授）

『琉球和文学 上』で平敷屋朝敏の和文を担当している間に、安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（平凡社ライブラリー）を読み返していた。

> ……蜂起の指導者たちは、みずからの生命を捨てる覚悟とひきかえに、じつは「古今無双の大たん者」となる……(傍点ママ)。一揆の指導者にとって、日常的生活者としての自己は否定する（＝死の覚悟をする）ということは、彼が生きている共同性の世界の全体についての責任をひきうるけるものになるということであり、なにが正義であり、なにが悪であるかについて、彼個人についてのさまざまの配慮や恐れをふりすてて自由に語る人間になるということであった。（pp. 318-319.）

このような一節に触れると、その実際が不明のままの平敷屋・友寄事件に通じるものを感じ取らざるをえない。

> 『毛姓美里家家譜』　三男友寄…横目川西平左衛門と組合い筋無きの事申し立て御在番所に落書入れ置き、且平敷屋と組み合い平左衛門の旅宿にも落書入れ置き、国家之御難題なる儀相工（たくら）み悪逆無道之族（やから）なる者ゆえ、…安謝湊（みなと）において八付（磔刑（はりつけ））、系記（家譜）島知行御取揚、欠所（財産没収）とし、…（訓読、大城康洋「平敷屋・友寄の周辺」、『報告書 近世の諸問題シリーズ（第Ⅱ弾～第Ⅳ弾）』浦添市教育委員会、1985 年、p. 57、傍線・表記など私に改めた）

詳細は不明だが、傍線「国家之御難題なる儀を相工（たくら）」んだというが、「落書」し、平敷屋朝敏、友寄安乗らが川西平左衛門と「取り合い＝共謀」した実際の内容は不明である。池宮正治は「これ（共謀と落書）が「国家之御難題」と王府が反応するのはおかしい。…「琉球科律」では、落書は四年以上十年の流刑にすぎないからだ。もっと根の深い、王府を震撼せしめた重大な事件でなくてはならない。国家顛覆罪か騒乱罪といったものであろう。」（前掲『報告書 近世の諸問題シリーズ（第Ⅱ弾～第Ⅳ弾）』「平敷屋朝敏研究の現在」）と、「国家顛覆」「騒乱」の可能性があるという。革命？クーデター？テロ？といった言葉が脳裏をよぎる。ここで、一揆や打ち壊しについての安丸の分析を再び引く。

> ……（稿者注－儒教をもととした「勤勉、倹約、質素」などといった「通俗的道徳」による）虚偽意識（稿者注－イデオロギー体系）の支配のもとでは…現実の経済的社会的な秩序はたえず道徳的人格的な秩序と意識されてゆき、その結果、経済的社会的な階層性はじつは道徳的人格的な階層性に根拠をもっているかのような転倒した幻想が普遍化してゆく。そこでは、貧しい人々は…（経済的精神的）劣敗者でもある。こうして…人間らしく生きようとしたたくさんの人たちの全人格的な努力は、経済的な敗北とともに無力感や諦観やシニシズムとなって社会の底辺部に大量に鬱積される。…（安丸、pp. 113-114.）

この儒教と通俗的道徳によって構成されている封建社会においては、自由や正義や解放を求める人間的努力が実を結ばないことは明らかで、朝敏も、そこに「大量に鬱積」された不満や憤りを感じ取り、かつ社会の底辺部からの「声なき声」として受け取っていたのではないだろうか。そこからもたらされたのが、平敷屋・友寄の「革命」の意志だったのではないか。しかしそれは「新たな国王」「新たな三司官」を求めるということ、つまり「限界付き」の「革命」である（にすぎない）ということもまた言われねばならない。朝敏が和文学作品において描いた「真の忠孝の世」は現実には来なかったのだ。

《稲が種子アヨー》と『風』

飯田　泰彦
（第16巻『琉狂言』担当校注者/竹富町役場職員）

八重山のほぼ全域に《稲が種子アヨー》系の古謡が伝承されている。『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』には《稲が種子アヨー》12篇、《種子取アヨー》4篇が収録されている。これらは島々村々によって詞章に長短の差がみられるが大同小異の内容である。一般に、これらは種子取祭（たねどりまつり）の儀礼的な歌謡として、稲の恙ない生育を祈願して謡われるものである。

歌詞は、農作業の始まりである播種に際し、吉日に稲叢から種子を取りだす種子取儀礼から、苗代への種子蒔き、稲の健やかな生育、その豊かな稔りと収穫など、対語・対句を重ねつつ、順序よく稲作過程を描写している。このような理想的な稲作の展開を幻視しながら、祈りをこめて謡い、来る一年の豊饒を招き寄せようとするのだ。

小浜勝義によると、かつて石垣島宮良村では、苗代田での播種を終えた苗代人衆は、その場に揃って胡坐をかき、長大な《稲が種子アヨー》を粛々と謡ったこともあったという。その背景には、「口どぅ追ー」(口をこそ追う)、即ち言葉どおりに事実が後を追うという、言霊信仰が認められよう。このように《稲が種子アヨー》は言霊の呪性に期待した歌謡だといえる。一同がどっしり胡坐をかいて謡うのも、蒔かれた種子がしっかり根付くことに擬した呪的行為なのである。

竹富島の種子取祭では、第7日目夕刻から翌朝まで、夜通し家々を訪ねて世乞儀礼が行われるが、各々の座敷では《稲が種子アヨー》を謡って、来る年の豊饒を予祝する。《稲が種子アヨー》といっても、隆起珊瑚礁の保水力の乏しい島に稲作は適さず、実際は粟作の過程が叙述されている。その《稲が種子アヨー》を厳かに謡い、続けて軽快な《根下りユンタ》を手拍子で掛けあうと、たちまち座は華やぐ。

この《根下りユンタ》は、《稲が種子アヨー》と一連の内容で、収穫後の場面まで描かれている。そこには収穫した粟で神酒をつくり、神女を招待してお祝いし、「くぬ酒ぬ旨さや/くぬ神酒ぬ香さや」と祝杯をあげる一コマも見受けられる。

《稲が種子アヨー》のように、生産活動の過程を叙事的に謡った歌謡を、小野重朗は「生産叙事歌謡」と呼んだ(『南島の古歌謡』)。その生産の対象は、農耕に関係するものだけでなく、八重山歌謡のなかには造船や家造り、井戸掘り、太鼓の新調などを謡った歌謡も見いだせる。

2019年から始まった『琉球文学大系』の編集事業も一つの生産活動であるといえよう。手元の事務局報『風』をみると、具体的な編集過程を知ることができる。巻頭の寄稿文も編著者・研究者によるものが多く、執筆者とテキストの関係を物語るにしても客観性が保たれ、どこか叙事的だ。これらも後世、琉球文学の研究史をふりかえるとき、重要な手引きとなるにちがいない。

その他、逐次刊行されるごとに催される記者会見やトークイベントの報告、マスメディアにおける関連記事の目録も堅実で、その一つ一つの事柄からも進捗する編集作業の手応えが感じられる。それはあたかも事業完遂を予祝するかのようだ。そういった意味で、『風』は生産叙事歌謡に共通する機能を備えているといえるかもしれない。

そこから「産みの苦しみ」も読み取れぬわけではないが、生産叙事歌謡は淡々と大河の流れるごとく、呪的に謡わなければならないだろう。『風』の便りから、編集事業の理想的な展開を幻視しつつ、豊かな稔り・収穫(＝事業の完遂)を実現させ、さらには祝宴までも待望するものである。

（竹富島種子取祭の世乞儀礼、2015年）

2024 年度 上半期業務報告

（4 月～9 月）

テキスト刊行に係る先島、県外出張（4 月～8 月）

4 月下旬から始まる『琉球和文学（上）』の編集合宿に入る期間を利用し、小林編集アドバイザーが『琉球歌謡 奄美篇』校注者、関係者のもとへ出向き（4/23～4/25）、これからのテキスト編集作業進捗を図る出張が行われました。『琉球和文学 上』に収録する底本調査及び絵図発見記者会見調整のため、波照間委員長、渡具知編集局長により 5/26（石垣）、8/7～8/8（東京）、8/10～8/11（石垣）の確認が行われました。

第 24 巻『琉球和文学 上』編集作業（5 月～6 月）

標記編集作業は池田公民館（5/9～5/19）を皮切りに、沖縄高速印刷（5/20～6/2）での作業の後、いったん琉大サテライト事務局に戻り、沖縄高速印刷での最終校正（6/3～6/25）をもって校了となりました。長期化の原因は諸般の理由が双方（名桜大と組版側）に発生し、結果として 50 日に及ぶ編集作業となりました（校了 6/27）。

西原町池田公民館での編集作業の様子

「琉球文学大系」組版製作業務委託（窓口）変更

本年４月下旬を契機として、第 1 巻から 9 冊の組版製作を担当した沖縄高速印刷㈱から、印刷団地組合内の「光文堂コミュニケーションズ㈱」へ版下製作の窓口変更手続きが行われました。本年度残り 2 巻を光文堂コミュニケーションズが担い、次年度 3 巻を「サン印刷」が行う変更について、名桜大学と「沖縄印刷団地協同組合」との「覚書」契約（7/16 制定）も併せて締結されました。

「宮良矼（仲尾次政隆翁建造）絵図」贈呈記者会見（8/10）

「琉球文学大系」編集刊行事業に取り組んでいる名桜大学主催で「宮良矼絵図」発見の記者会見発表がマスコミ 5 社（新聞社 3 紙、テレビ局 2 社）を集め、仲尾次政隆翁ゆかりの地である石垣市内「大濱信泉記念会館」で開催されました。6 月に刊行された『琉球和文学（上）』編集の最中、「配流日記」を書いた仲尾次政隆翁子孫に当たる仲尾次政剛氏（東京在）が保管していた「配流日記」原本調査の際、和紙に描かれた「宮良矼絵図」が発見されました。1862 年作成の、近世末期の土木技術を伝える重要史料発見は、地元登野城出身の波照間永吉委員長とのさまざま縁が重なる幸運に恵まれました。貴重な絵図原本は仲尾次政剛氏のご厚意により、地元石垣市へ寄贈されました。

石垣「宮良橋絵図」発見記者会見の様子（8/10）、大濱信泉記念館

光文堂コミュニケーションズ㈱組版製作業務開始（8/22～）

本年 2 冊目の組版製作業務委託（窓口）となった光文堂コミュニケーションズと名桜大学協働による第 29 巻琉球史関係史料 2『球陽 下』の編集作業が開始されました。

産学連携三者連絡調整会議開催！（9/13）

標記三者とは①ゆまに書房、②沖縄印刷団地協同組合（版下製作）、③名桜大学（編さん）を指しており、本年度の標記会議は名桜大学で開催されました。印刷団地組合からは光文堂コミュニケーションズ（2024 年度 2 冊）及びサン印刷（2025 年度 3 冊）2 社が組合窓口として参加し、ゆまに書房を含めた三者対面による協議（沖縄開催のみ）では、役割分担や協働業務の確認など建設的な意見交換が行われました。

産学連携三者の固い握手の様子（9/13）、名桜大学

沖縄県系人のアイデンティティ

比嘉　万里杏（大系大学事務局）

去る 10 月 30 日は「世界のウチナーンチュの日」でした。移民や出稼ぎで人の移動が多かった沖縄では 10 月から 11 月にかけて、移民関連のイベントや催しが開催されています。私は名護市屋部の出身で、大学の卒業論文では上野英信著『眉屋私記』に描かれている山入端家の移動について研究しました。『眉屋私記』の序章にも鮮明に描かれている「渡波屋（とわや)」は県外、海外へ旅立つ多くの人たちを乗せた船を見送るために白い煙を焚いた場所として語り継がれています。

沖縄から海外への移民は明治から始まり、現在も約 42 万人の沖縄県系人が海外に住んでいるといわれています。明治期から昭和期にかけて海を渡った県系 1 世と呼ばれる方たちのほとんどが亡くなっているなかでも、その子孫たちが世界のウチナーンチュ大会などを通して故郷である沖縄との繋がりを絶やさずにいます。私が移民について調べているなかで興味深く感じたのは、県系人の団結力と沖縄の文化を継承しようという思いが強いというところです。移民の多くは出稼ぎ目的で、数年働き故郷へ錦を飾る気持ちを持っていましたが、それを叶えられたのは一握りでした。現地で家庭を持ち、子孫とともに移民先に永住している人も多くいます。移民先には名護町人会など集落ごとの組織もあり、県系 3 世や 4 世の話を聞くと、移民先でも沖縄のゆいまーる精神、いちゃりばちょーでー（出会えば兄弟）の精神を子孫に受け継いで、支えあいながら暮らしているとのことでした。さらに話を聞くと実際に沖縄に住んでいる私たちよりも、移民先の同世代の方が沖縄文化への興味が強いようにも感じました。遠い地で生まれ育ったとしても、県系人というアイデンティティを大切にし、沖縄のことを愛し、文化を学び継承しようという思いがあることに感銘を受けました。沖縄県民も世界のウチナーンチュと交流することで実際に住んでいる沖縄についても興味や関心を持ち学ぶきっかけづくりにもなると感じました。

「琉球文学大系」編集刊行事業は琉球諸語によるテキスト編さんでもあり、世界のウチナーンチュにとっても宝になるものと思われます。私も「琉球文学大系」編集刊行事務局で沖縄について学んでいくなかで、その学びを世界のウチナーンチュたちへ広げられていけるような活動ができればと思っています。

「琉球文学大系」事務局の人事異動

2024 年(令和 6 年)度人事異動により、名桜大学研究所 2 階の大学事務局に比嘉万里杏係員、サテライト事務局(琉大地域創生総合研究棟 2 階)に石橋佐紀子係員が新規に配属となりました。また、前年度下半期途中の人事異動(2023 年 11 月 1 日付)では、浦崎淳也係長が大学事務局に配属となっております。

「琉球文学大系」関連記事目録—2024 年 4 月～2024 年 9 月

- 琉球新報北部支社記者「寄付 比嘉良雄さん、梨香さん夫妻が名桜大学に 100 万円」（琉球新報，2024 年 6 月 22 日，日刊／20 面）
- 宮川耕次（琉球文学大系執筆委員）「〈琉球文学大系〉事業から『琉球民俗関係資料 4』を刊行」（上）・（下）（宮古毎日新聞，2024 年 8 月 10 日，日刊／8 面，2024 年 9 月 15 日，日刊／10 面）
- 照屋大哲（琉球新報八重山支局記者）「石垣「宮良橋」の絵発見」　（琉球新報，2024 年 8 月 11 日，日刊／26 面）
- 八重山毎日新聞編集部「「162 年前の宮良橋」絵図発見」「私財投じ宮良橋を再建」「記者席 ゆかりの地に縁」　（八重山毎日新聞，2024 年 8 月 13 日，日刊／1 面・8 面・9 面）
- 八重山毎日新聞編集部「社説 歴史に見る民衆の石—発見された宮良橋の絵図—」　（八重山毎日新聞，2024 年 8 月 14 日，日刊／2 面）
- 比嘉盛友「不連続線（コラム)」　（八重山毎日新聞，2024 年 8 月 17 日，日刊／1 面）

事務局だより

この度新本部棟（名桜大学創立 30 周年記念事業）竣工に伴い、名桜大学創設以来旧本部棟にあった大学事務局の大がかりな移転が 9 月中旬から始まりました。環太平洋地域文化研究所 2 階にあった「琉球文学大系」編集刊行事務局は「地域連携推進課」があった 1 階に移転となりましたのでお知らせいたします。